巻　頭　言

２０２０年度の事業報告書の発刊に際しまして、一言ご挨拶を述べさせて頂きます。

昨年度よりサステイナビリティ研究所は、ＳＤＧｓ関連の諸事業の推進を目指して組織改編を実施し、新たな取り組みを開始いたしましたが、この一年間は、本来のサステイナビリティ研究所が行うべき本学の対外的な諸活動がコロナ禍の影響を多大に受けることで様々な制約を課せられたものになりました。大学内に目をやれば、前期は全て遠隔授業となり、後期にはコロナ対策を十分施したうえで対面授業を開始するものの、正月明けには本学の学生に陽性者が出て、再度遠隔授業を強いられるという、教職員、学生にとっても波乱の一年でありました。これは、もとより本学を取り巻く環境だけの問題ではなく、世界全体を巻き込んだ、言わば人類に課せられた課題をパンデミックという形で突き付けられたものでした。思えば、昨年度の本報告書発刊時にもすでにその懸念は投げかけられていたところですが、コロナヴィールスは変異することでその感染力を一層増し、一年後の現在でもまだこの災禍の収束の目途は立たずにあります。

そんな一年ではありましたが、限られた条件の中でも新たな活動の試みがなされました。本報告書に示すＳＤＧｓ関係の諸活動が、本学内及び鳥取県、市町村、商工会等、本学を取り巻く社会環境の中にも新たに展開され、サステイナビリティ研究所を中心に本学関係者が深くかかわって推進することができました。そのような背景のもとに本報告書をここに無事発刊できることは、私としまして、ほっと胸をなでおろす感がいたします。本報告書が後年また紐解かれ、コロナ禍の中にあった本学の歴史として後人達の何らかの参考、示唆になれば幸いなところです。

「人間万事塞翁が馬」のたとえのように、災禍は単なる災いではなく、明日につながる福となる可能性もあります。本来の授業形態でないオンライン、オンデマンド講義を行う教員、あるいはそれを受ける学生の中にあっても、思わぬプラスの発見もあったように思います。このコロナ禍収束の暁にはきっと異なった形の明るい未来が展開できることを祈念したく存じます。

一日も早いコロナ禍の収束を願うとともに、今後のサステイナビリティ研究所の新たな活動展開を期して、巻頭言に代えさせていただきます。

２０２１年６月吉日

サステイナビリティ研究所

所長　田島　正喜